



Title	フォントの違いによるイメージの伝達効果
Author(s)	石原, 次郎; 熊坂, 亮
Citation	独語独文学研究年報, 29, 25-40
Issue Date	2002-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26137
Type	departmental bulletin paper
File Information	29_P25-40.pdf



フォントの違いによるイメージの伝達効果

石原次郎 / 熊坂亮

1. 問題提起

われわれは、ちょっと困惑するような状況に向かい合っている。日常的な言語使用の場面では、フォントの選択、つまり書字の視覚的な刺激によるイメージや情報の伝達は、きわめて当たり前の事態である。何か非常にあいまいな「感じ」に導かれているにせよ、広告、ポップ、店の看板、商品のロゴマーク、本の装丁、漫画の吹き出しなどを作る際に、作り手がフォントに気を配るのはむしろ当然だろう。フォントばかりではない。書字の大きさ、書字の色、配置にまで、往々にして注意が向けられる。それを目にする者は、その効果を楽しんだり、評価したりしている。このように、実際の場面では、フォントや、それに類する書字の視覚的な側面が、イメージや情報の伝達に一役買っていることは自明なのに、他方これに着目した研究がまったく存在していないのである。わずかにフォントに言及した Massironi (2002) の研究も、フォントをグラフィック・イメージとの関連でしか扱っておらず、言語との関連での考察は行っていない。

研究が存在しない原因は2つほど考えられる。ひとつは、書字の視覚的な側面が、きわめて複雑な現象であると容易に推察できる点。書字のイメージ伝達力を調べるには、書字を視覚刺激と割り切って、その知覚心理学的な側面を調べ上げる必要がある。ところがこの知覚要素は、非常に多様である。描線の太さ、描線のカーブ、描線の密度、描線の長さなどの要素を洗い出して、それを星の数ほどもある文字ひとつひとつに適合するようにデータ化する作業は、気が遠くなる。また、書字が単なる描画ではないことも、ことを余計に厄介にしている。描線に関する知覚心理学的なモデルが幸運にも完成したとしても、次にはそれぞれの視覚刺激要素が、最初から情報を伝達してしまう言語とどう関係しているのか。その組み合わせたるや、すさまじいものになる。それだけではない。フォントの使用は、社会現象でもある。あるフォントは、あるジャンルなりあるタイプのテキストと結びついているために（国語の教科書に特徴的な教科書体、ほとんどの学術文献に使われる明朝体、店の掲示などに多用されるポップ体など）、あるフォントに一般的と認められるイメージは、果たして知覚心理学的な諸要素に還元できるのか、それとも社会的な使用頻度による学習の産物なのか。こうした複雑な困難さは、あるいは周到で根気の要る作業の積み重ねで解決できる可能性がある。あるいは、こうした複雑さを一挙に解決するまったく違った学術的なデバイスを考案すればいいのかもしれない。

もうひとつの原因は、かなり根が深い。それは、いかに言語であれ、書字ならば視覚刺激、音声言語なら聴覚刺激がまずもって関与しているという事態をさほど重要とは考えない先入見が、研究者の中にはびこっている可能性があるということである。言語の研究は、どの

分野であれ、伝達されている情報の基本量（シニフィエ）だけに関わるケースが圧倒的だ。こうした観点からは、たとえばフォントの違いによって変化する伝達イメージは、言語にとってはよく言っても副次的、極端な場合だと関与性など無視していい、と思われて、そもそも研究対象に全然値しないと考えられているふしがある。われわれがここで提示する調査とその分析は、その先入見がかなり危険なものであることを示すはずである。また、こうした先入見は、広告のデザイナー、本の装丁者、漫画家などの苦勞をないがしろにしているし、その勞作を受容している私たちの日常的な経験に目をつぶっていることも示している。

この論考では、こうした厄介な事情にある種の解決を見出すために、フォントがイメージ伝達と、したがって書字の基本的な情報を変更するような作用に関与しているかどうかを明らかにすることが主な目的である。先行研究を参照できないこと、また著者たちがこうした調査のスキルをいまだに十分身につけていないことから、この論考は方法的な欠陥が多々あると思われる。その点は識者の建設的な批判を仰ぎたい。それでも、われわれの問題提起は、十分に意義があることを確信している。

2. 調査

フォントの違いによって、同じ内容を示すテキストのイメージに変化があるかどうかを調べるために、5つのフォントを選んで質問表を作成した。フォントはさまざまなものを指し示しうる言葉だが、ここでは、Microsoft社のOffice2000にあるフォントを用いることとした。各々のフォント名は、下記のfig.1に付記してある。調査が実施されたのは2001年10月、有効回答数は228件であった。

調査にあたって提示されたサンプルはfig.1の通りである。

(MSゴシック)	駐車禁止	涼風	びっくり!
(HG丸ゴシックM-PRO)	駐車禁止	涼風	びっくり!
(HGS行書体)	駐車禁止	涼風	びっくり!
(江戸勘亭流)	駐車禁止	涼風	びっくり!
(HGS創英角ポップ体)	駐車禁止	涼風	びっくり!

複雑系の量子カオス現象詳説	熱湯
複雑系の量子カオス現象詳説	熱湯
複雑系の量子カオス現象詳説	熱湯
複雑系の量子カオス現象詳説	熱湯
複雑系の量子カオス現象詳説	熱湯

fig.1: 提示したテキスト群

この5群のサンプルには、それぞれ次のような9つの質問を付記して、それがもっともあてはまると思うフォント、2番目に当てはまると思われるフォントにマークをしてもらった。質問項目は以下の9つである。

- 禁止：〔設問1〕 どれが駐車禁止を促すのに効果的か
- 涼風：〔設問2〕 どれが涼しそうか
- びっくり：〔設問3〕 どれがいかに驚いていそうか
- 複雑系の：〔設問4〕 どの書名が難しそうか
〔設問5〕 どの書名が難しくなさそうか
- 熱湯：〔設問6〕 どれが熱そうか
〔設問7〕 どれが熱くなさそうか
〔設問8〕 どれが「危険」「近づくな」を表示していそうか
〔設問9〕 どれが「ご自由にお使いください」を表示していそうか

〔設問1、8〕は、フォントが禁止、命令といったイメージを伝達するかどうか、〔設問2〕は、フォントが涼しさといった感覚的イメージを伝達するかどうか、〔設問3〕は、フォントが驚きという感情を強化するようなイメージを伝達するかどうか、〔設問4、5〕は、フォントが難易度のイメージと関係するかどうか、〔設問6、7〕は、フォントが熱感覚のイメージを伝達するかどうか、〔設問8、9〕は、フォントが禁止や促しといったイメージと関係するかどうか、をそれぞれ調査の目標として選んだものである。

被験者は北大の学生が中心で、知人などへの調査票の依頼をあわせて行った。有効回答数228の内訳は、男性83、女性145であった。最低年齢は18歳、最高年齢は78歳、平均28.3歳であった。

男女の例数に差がある(1:1.75)こと、また男女間に得点分布の極端な食い違いがなかったことから、今回の分析では、性差は考慮しなかった。また、結果的に被験者の年齢層が18-28歳に集中した(全体の68.86%)ため、世代別の分析は断念した。

3. 単純集計の結果

集計に当たっては、各質問項目で最も当てはまるとした回答を2点、2番目に当てはまるとした回答を1点、チェックのなかった回答を0点として、各項目の総得点数を合算した。各項目の得点の単純集計結果はfig. 2、table. 1にあるとおりである。

この結果からすでに、各フォントがイメージの伝達にそれぞれ固有の役割を果たしていることが推測できる。

「駐車禁止」でゴシック体が1位となっているのは、やはりゴシック体が一般的でいわば当たり障りのないフォントであり、したがっていわば生真面目に、表示されているメッセージの基本的な内容を伝達していることを示唆しているようである。同様のことは、「書名困

難」でゴシック体が2位とはいえ、高い得点を示している点に窺われる。「涼風」でのゴシ

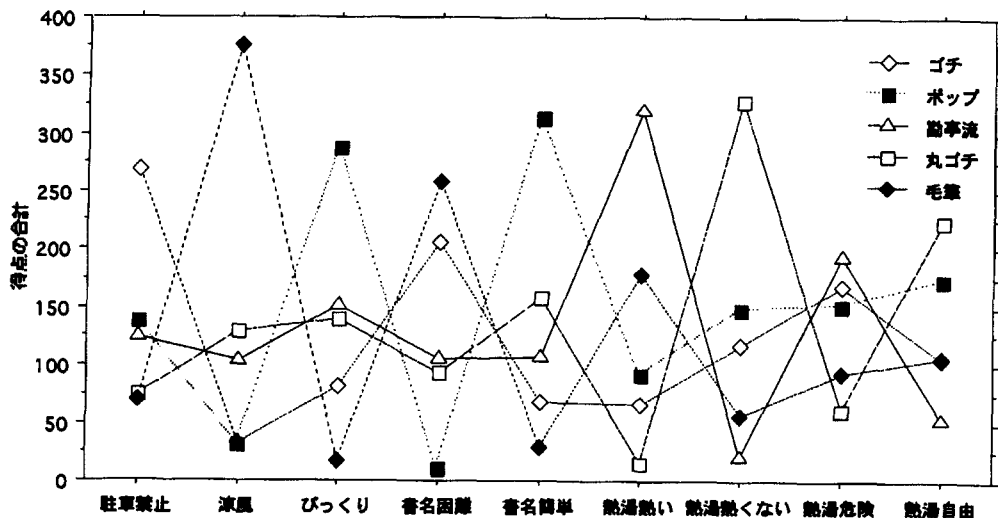


fig. 2 : 各項目のフォント別得点

	駐車禁止	涼風	びっくり	書名困難	書名簡単	熱湯熱い	熱湯熱くない	熱湯危険	熱湯自由
ゴシック	269	33	81	206	68	66	118	168	106
丸ゴシック	75	130	139	94	159	16	329	61	224
毛筆	70	376	17	258	29	179	56	93	108
勘亭流	124	104	151	106	107	320	21	194	53
ポップ	138	30	287	11	313	92	148	152	173

table. 1 : 各項目のフォント別得点

各名称の説明

書名困難：設問4（難しそう）

書名簡単：設問5（難くなさそう）

熱湯熱い：設問6（熱そう）

熱湯熱くない：設問7（熱くなさそう）

熱湯危険：「熱湯」に関する設問8

熱湯自由：「熱湯」に関する設問9（ご自由に）

ゴチ：MSゴシック体

丸ゴチ：HG丸ゴシックM-PRO

毛筆：HGS行書体

勘亭流：江戸勘亭流

ポップ：HGS創英角ポップ体

ック体の得点は逆に47点とかなり低く、ゴシック体がとりたてて何か特別なイメージを伝達することには関与していない可能性を窺わせる。

「涼風」では毛筆体が圧倒的な1位になっているのも、これに類似したフォントが、近年お茶のペットボトルのデザインに多用されていること、また涼風という言葉自体、浴衣などの日本の伝統的な夏の清涼感と結びつきやすい感があるなどから、比較的容易に予想できた。

社会的な経験による学習から、毛筆体→お茶のペットボトル→清涼感、というイメージが強化されており、このパスを通して、毛筆体が清涼感を伴う「涼風」ということばと結びついたらと推測できる。

「びっくり」では、ポップ体が1位である。これは、この書体が、文字通り店舗のポップ表示や漫画などの、親しみやすさ、気軽さ、身近さなどを演出しようとする場面で多用されることと絡んで、おどけたびっくり感と通じるものがあつた結果だろう。各フォント間での得点差は、被験者がどんな「びっくり」をイメージしたかに関わっているのかもしれない。

「書名困難」では、われわれは一般に学術書の背表紙に見出す確率が高いゴシック体が1位になることを予測していたが、集計結果では毛筆体が1位となった。その理由は、即座には理解しがたい。ただ、ほかのフォント、特にポップ体の得点が11点ときわめて低いのは、やはりポップ体が一般に使われる場面でのイメージとの食い違いが如実に反映されたものだろう。

「書名簡単」でも、ポップ体が1位となったが、これもまた、ポップ体の親しみやすさや身近さという、一般にあると予想できるイメージと大いに関連していると考えられる。「書名困難」ではポップ体の得点はわずかに11点、やはりポップ体は簡単さ、気軽さと関連しているようである。ゴシック体の得点が低いのは、「駐車禁止」で推測した、ゴシック体の生真面目さというイメージを支持しているように思われる。毛筆体は最下位の29点にとどまった。毛筆体は、やはりなんらかの理由で、難しさ/簡単さというイメージ対と関わっているようだ。

「熱湯熱い」では、勘亭流が1位。これは、「涼風」との対比で考えると、湯気の揺らぎ、熱さと描線の厚さ→暑苦しさと連想からくるものかと考えることができる。1位としては、ほかのフォントと僅差ではあるが、「熱湯危険」で勘亭流が得点数が多いこともこれを裏付けそうだ。「熱湯熱くない」というイメージについての設問で、勘亭流がわずかに21点であったことも、この予測をある程度強化しているよう。ゴシック体、丸ゴシック体の得点が低かったのは、「涼風」でのゴシック体と丸ゴシック体の得点の低さと関係する可能性がある。

「熱湯熱くない」では、丸ゴシック体がずば抜けた1位となった。この現象はわれわれには即座には理解できにくかったが、提示されたフォントの中で丸ゴシック体の描線がいちばん細く、したがって先ほどの厚さ→暑苦しさと、というイメージとの対比から、このフォントが選ばれたのかもしれない。加えて、やはりゴシック体はあまりイメージを伝達しない、という、やはり消極的な原因が絡むのかもしれない。勘亭流は、「熱湯熱い」の1位を裏づけるように、最下位となった。

「熱湯危険」と「熱湯自由」での獲得点数の差は、かなり小さいものにとどまった。フォントによる安全か危険か、というイメージ伝達は、少なくとも今回の調査で提示した5つのフォントに関しては、さほど大きな差がなかったと考えるべきだろう。わずかに、丸ゴシック体に着目できそうなだけである。このフォントは、「熱湯危険」では、僅差ではあるが最

下位なのに対して、「熱湯自由」では（これもほかのフォントの得点の開きよりは小さいが）1位となっている。あるいは、丸ゴシック体は、このケースでは、危険ではないというイメージの伝達に関与しているのかもしれない。

つぎに、フォントを軸とした観察をしてみよう。結果を理解しやすくするため、fig. 3にそのグラフを示してある。

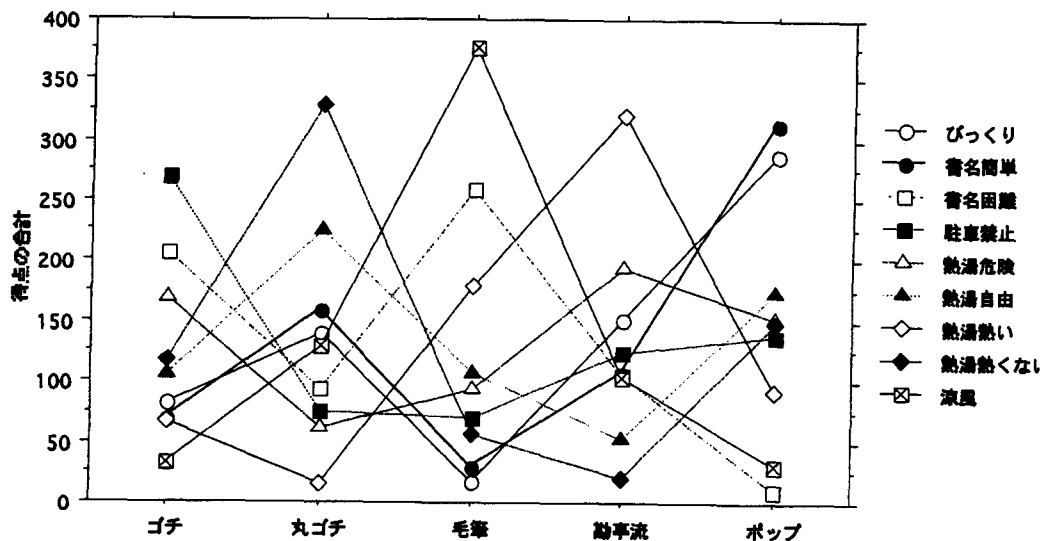


fig. 3 : フォント別の各項目得点

ゴシック体は、「駐車禁止」、「書名困難」、「熱湯危険」で高い得点を示している。先に、ゴシック体は一般的で当たり障りがなく、したがって特定のイメージを伝達しないようだと予測した（ゴシック体は、涼しさ、熱さ、驚きといったイメージとは、さほど関わっていない）が、この得点の高い3者からは、むしろゴシック体が、禁止、困難、危険といった、生真面目さを越えたある種の強制力、堅苦しさなどのイメージを積極的に伝える可能性がある。

丸ゴシック体は、「熱湯熱くない」、「熱湯自由」で高い得点。この両者からは、丸ゴシック体は、少なくとも熱いという感覚的なイメージとは関係しないことが予測できるが、先にも述べたように、少なくともこのケースでは、丸ゴシック体だけがとりわけそうした特徴を持っているとは一概には判断しにくい。このフォントにおける低い得点群を見ると、熱さ、危険、禁止、難しさというネガティブなイメージにはさほど関与していないようである。

毛筆体は、「涼風」が圧倒的に高く、次いで「書名困難」と「熱湯熱い」がこれを追っている。先ほど、毛筆体は日本の伝統的な清涼感と結びつきやすいか、という観察をしたが、この3者を並べてみると、この予測は修正が必要だろう。「涼風」と「熱湯熱い」に共通すると思われるのは、熱感覚のイメージであると思われ、ひよっとするとそれが熱いか涼しいかはあまり関与しないのかもしれない。さらに、「書名困難」でも毛筆体の得点が比較的多

いわけで、邪推に近い深読みをすれば、毛筆体には、感覚的なイメージとはまた別に、たとえば書道の授業の体験にまつわるうっとりさ、七面倒くささなどが反映されている可能性もある。

勘亭流は、「熱湯熱い」が高得点で、あとはさほどの差を示していない。勘亭流は、ご存知のように相撲でほぼ独占的に使用されるフォントで、それが相撲とは関係のない熱さのイメージの伝達に一役買っているのは、興味深い。先ほどの推測、湯気の揺らぎ、暑苦しさとという連想がこれに絡むのかもしれない。あるいは、勘亭流がよくある銭湯の看板（「湯」）やカキ氷ののれんを連想させることが、これに関係するのかもしれない。得点が低いのは、熱くない、自由に使ってよいという項目で、この結果は勘亭流が熱さや危険といったイメージに関係するという推測をやはり物語るものだろう。

ポップ体は、「書名簡単」と「びっくり」にかなり得点が集中しており、逆に「書名困難」の得点が低い。これは、先ほどの推測に変更を加えるデータではなかろう。「涼風」の得点が低いのは、ポップ体の一般的なイメージが、涼しさとはそぐわないのか、それともポップ体の描線の太さが涼しさとは合わないのかは、この結果からは判然としない。

4. 単純集計結果の考察

このように観察すると、まず、フォントはわれわれが当初予測していた以上に、なにかのイメージを伝達する役割を担っていることが分かった。論考の冒頭でも述べたとおり、書字の視覚的な刺激は、書字が伝える基本的な情報を強化したり（ポップ体や、「涼風」における毛筆体など）、あるいはそれとは関係のないイメージを伝達したり（「熱湯熱い」における勘亭流など）しているのである。つまり、フォントの違いによる視覚的な情報の差は、ある場合には、その書字が、フォントの違いとは関係なく伝達する言語の基本的な情報を捕捉したり、強化したりするし、また別の場合には、言語の基本的な情報とはあまり関係しないイメージを付け加えて、結果的に基本的な情報とは違った情報を生産すると考えられる。その際、各フォントにおけるどのような視覚刺激の要因が関与しているのかは、この調査からは判断できない。

とりあえず所見をまとめると、書字を受容する際には、そこに何が書かれているか、という言語情報の基本的な処理と、視覚的な刺激からの情報の処理とが、相互にある程度独立しながら、並行して行われていると考えられる。どちらの情報処理が先行するかをこの時点で判断するのは早計だろう。

考察の結果から、書字の情報処理の基本的なプロセスを図式化すると fig. 4 のようになると考えられる。視覚的な情報処理と、言語的な情報処理とが、最終的に常に統合されるかどうかは、判断を差し控えておきたい。両者のイメージの齟齬による、統合を阻むという効果も、少なくとも作り手の側に立つと、十分に考えられるからである。

ただここで注意すべき点がいくつかある。まずは、先にも述べたように、フォントが伝達すると思われるイメージは、社会的な経験による学習の強化を媒介にしている可能性がある

点で、したがってあるフォントが常にあるイメージを生産すると仮定することは慎むべきで

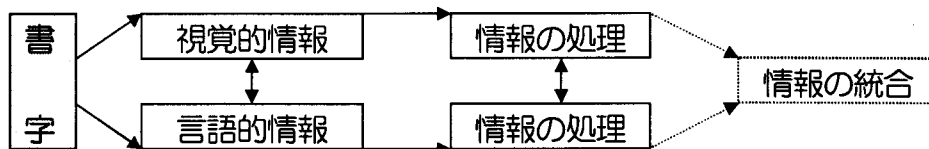


fig. 4: 書字の情報処理モデル

ある。また、今回の調査のように、5つに限定されたフォント群から、半ば強制的に設問に合致する項目を選ばせた場合、その選択の原因が、特定のフォントが伝達するイメージそれ自体にあるというよりも、それ以外のフォントがイメージに合わないから、という消極的な理由である可能性は十分に考えられる。フォントイメージが、ほかのフォントとの比較によって相対的に定まってくるという可能性は十分にありうる。この点は後述する。

こうした点も十分に考慮して、次節ではこの統計の因子分析を行って、フォントイメージに関する隠された動因を探ってみたい。

5. 因子分析による考察

各フォントを、設問別に主因子法バリマックス回転による因子分析にかけると、また様子が変わってくる。まず、各フォントの因子得点を、table. 2に示しておく。

	因子1	因子2	因子1	因子2	因子1	因子2	因子1	因子2	因子1	因子2
駐車禁止	.499	.020	.475	.286	.217	.288	.324	-.226	.605	-.065
涼風	.089	.745	.008	.053	-.313	-.389	-.170	.113	-.051	-.045
びっくり	.903	-.041	-.115	-.127	-.045	-.064	.000	.011	-.031	-.007
書名困難	-.006	.178	-.057	.861	-.031	-.757	.007	-.835	-.041	.925
書名簡単	.070	.225	-.064	-.834	-.030	.773	.000	.841	-.337	-.546
熱湯熱い	-.076	.767	.280	0.83	.779	-.020	.725	.153	.734	-.018
熱湯熱くない	.439	-.389	-.493	-.139	-.486	.345	-.716	-.029	-.722	.004
熱湯危険	.320	.034	.855	-.076	.698	.188	.615	-.121	.761	.105
熱湯自由	-.103	.291	-.746	.002	-.718	.000	-.646	.113	-.787	-.042
	ゴシック		丸ゴシック		毛筆		勘亭流		ポップ	

table. 2 : フォント別の因子分析 (p<.0001)

因子分析の結果、ある程度の相関性が観察できたのは、毛筆体、勘亭流、ポップ書体にとどまった。ゴシック体では、単純集計の結果からは、強制力、堅苦しさとといったイメージが予想されたが、因子分析の結果はあまり芳しくない。また、丸ゴシック体に関しては、さほど

の際立ったイメージは予想できなかったのだが、因子分析からは、この書体には、危険さ、困難さのイメージがあるとの示唆が現れている。この点は後で述べることにして、まずは後者3つのフォントに関して、分析の結果をまとめておこう。

毛筆体の第1因子では、熱くて危険、といったイメージが現れているのに対して、単純集計では1位を占めていた「涼風」の涼しさはさほど大きな関与を示していない。第2因子のレベルでも、「涼風」の関与率は低く、それに対して、書名の簡単さのイメージが大きく関わる結果となっている。これもまた、単純集計とは食い違った結果である。

勘亭流の第1因子は、やはり熱くて危険といったイメージが主な原因という結果が出た。第2因子のレベルでは、簡単さというイメージの関与が示されている。第1因子に関しては、単純集計を裏づけるデータではある。

ポップ体では、第1因子は熱くて危険というイメージが析出されている。さらに第2因子にいたっては、難しいというイメージが大きく関与しており、単純集計の結果からの予想とはまったく逆である。

この因子分析の結果は、非常に判断に苦しむものとなった。この点は、われわれが、因子分析に適した調査をあらかじめ設定できなかった未熟さに負うところがほとんどなのだが、さらに、各イメージ間に連続性なり対比なりの関係性が希薄なものが多いこともその原因と考えられる。これに関しては、調査デザインの精密化を図るべく、大いに反省している。

ただ、すべてのフォントを通じて、この調査からは、イメージ項目の一部、つまり、熱湯に関しての、熱い／熱くない、危険／危険ではないというイメージの2対が、第1因子のレベルで大きくかかわっていることは予測できる。そこでわれわれは、このイメージ2対のみに関して、因子分析を行ってみた。分析法は、先ほどと同じく主因子法バリマックス回転による因子分析である。その結果は table. 3 に示してある。

この因子分析の結果、フォント間の関係にある特徴が出てきた。まず、ポップ体は、どのフォントとの対比で分析されるかによって、イメージが変化する。ゴシック体および丸ゴシック体との対比では、ポップ体は危険さ、熱さのイメージに関与していることが分かる。ところが、毛筆体、勘亭流との対比をしてみると、ポップ体は危険ではない、熱くないというイメージに関与する。また、ゴシック体は、ポップ体との対比では、熱さや危険さには関与していないが、勘亭流との対比では、熱さに対する関与が析出される。つまり、熱くなくて安全というイメージと、熱くて危険というイメージを軸にすると、少なくとも次のような関係が想定できそうだ。

<u>熱くなくて安全</u>		<u>熱くて危険</u>
ゴシック体	<	ポップ体
ポップ体	<	勘亭流
勘亭流	<	ゴシック体

とはいえこれは、奇妙なねじれを含んだ関係である。ポップ体がゴシック体に比較して熱く

		因子1		因子2				因子1		因子2	
熱い	ポップ	.823	.172	ポップ	.764	.203	ポップ	-.645	ポップ	-.748	-.338
	ゴチ	-.045	.061	丸ゴチ	-.049	-.034	毛筆	.320	勘亭流	.014	.925
熱くない	ポップ	-.643	.000	ポップ	-.342	-.780	ポップ	.726	ポップ	.757	-.186
	ゴチ	.104	-.252	丸ゴチ	-.068	.868	毛筆	.003	勘亭流	-.014	-.430
危険	ポップ	.826	-.178	ポップ	.834	-.014	ポップ	-.772	ポップ	-.836	-.123
	ゴチ	-.281	.736	丸ゴチ	-.001	-.107	毛筆	.078	勘亭流	.062	.489
自由	ポップ	-.720	.439	ポップ	-.761	.040	ポップ	.849	ポップ	.815	.026
	ゴチ	-.018	-.835	丸ゴチ	.095	-.024	毛筆	-.195	勘亭流	.017	.032

		因子1		因子2				因子1		因子2	
熱い	ゴチ	.800	-.255	丸ゴチ	-.140	.000	勘亭流	-.352	-.806		
	勘亭流	-.912	.004	毛筆	.712	-.213	毛筆	.719	.205		
熱くない	ゴチ	-.176	.121	丸ゴチ	-.224	.345	勘亭流	-.147	.814		
	勘亭流	.749	.343	毛筆	-.060	.042	毛筆	-.185	.135		
危険	ゴチ	-.235	-.061	丸ゴチ	-.231	-.786	勘亭流	-.030	.000		
	勘亭流	-.060	-.241	毛筆	.829	.155	毛筆	.837	-.173		
自由	ゴチ	.486	-.417	丸ゴチ	-.121	.837	勘亭流	-.010	.080		
	勘亭流	-.029	.880	毛筆	-.368	-.345	毛筆	-.568	-.090		

		因子1		因子2		因子3			因子1		因子2	
熱い	ゴチ	.340	.044	ゴチ	-.355	-.207	.653	丸ゴチ	-.087	-.744		
	丸ゴチ	.843	.041	毛筆	.793	-.140	-.108	勘亭流	.149	.092		
熱くない	ゴチ	.134	.204	ゴチ	-.413	.099	-.916	丸ゴチ	-.065	.790		
	丸ゴチ	-.729	.104	毛筆	-.164	.306	.744	勘亭流	.251	-.100		
危険	ゴチ	-.001	-.680	ゴチ	-.040	-.918	-.001	丸ゴチ	.048	-.317		
	丸ゴチ	.103	-.122	毛筆	.791	.519	.438	勘亭流	.144	-.186		
自由	ゴチ	-.051	.913	ゴチ	-.168	.377	.062	丸ゴチ	-.768	.305		
	丸ゴチ	-.013	-.019	毛筆	-.360	.212	-.116	勘亭流	.963	.278		

table. 3 : 「熱湯」に関する因子分析 (p<.0001)

て危険なイメージを伝達すると想定されるのは、字体が太いことに由来するのか。また、勘亭流はポップ体同様かなり太い描線を有するので、このケースでは、勘亭流の揺らぎが熱さ

を伝達する要因なのか。さらに、勘亭流は、ゴシック体との関係では、その場面へのそぐわなさが影響して、生真面目さを持つと考えることもできるゴシック体のほうが、熱くて危険なイメージにより関与するのか。

この関係のねじれはどう解釈すればいいのか。そこで新たに、ポップ体とほかのふたつのフォントとの相関を、主因子法バリマックス回転による因子分析で調べてみた。(table. 4)

		因子1		因子1		因子2		因子1		因子2		因子1		因子2	
熱い	ゴチ	-0.001	ゴチ	-0.007	-0.025	ゴチ	.044	.897	丸ゴチ	.098	.009				
	丸ゴチ	.059	毛筆	-.531	.198	勘亭流	-.009	-.662	毛筆	.470	.000				
	ポップ	.858	ポップ	.796	-.209	ポップ	-.806	-.124	ポップ	-.553	-.091				
熱くない	ゴチ	-.060	ゴチ	-.293	-.057	ゴチ	.033	-.170	丸ゴチ	-.855	.027				
	丸ゴチ	.071	毛筆	.836	.261	勘亭流	-.001	.755	毛筆	.002	.002				
	ポップ	-.391	ポップ	-.506	-.128	ポップ	.532	-.032	ポップ	.811	-.011				
危険	ゴチ	-.214	ゴチ	.104	-.511	ゴチ	.270	-.006	丸ゴチ	.006	.701				
	丸ゴチ	.040	毛筆	.057	.931	勘亭流	.237	-.001	毛筆	-.064	-.040				
	ポップ	.822	ポップ	.042	-.301	ポップ	-.863	.013	ポップ	-.060	-.265				
自由	ゴチ	-.099	ゴチ	-.028	.029	ゴチ	-.011	.086	丸ゴチ	-.018	-.896				
	丸ゴチ	.063	毛筆	-.089	.013	勘亭流	-.012	-.024	毛筆	.028	.523				
	ポップ	-.679	ポップ	-.032	-.002	ポップ	.759	-.034	ポップ	.144	.294				

		因子1		因子2		因子1		因子2	
熱い	丸ゴチ	.002	.024	毛筆	.367	.324			
	勘亭流	.174	-.048	勘亭流	.041	-.860			
	ポップ	.378	.481	ポップ	-.732	-.001			
熱くない	丸ゴチ	-.052	.817	毛筆	-.072	.091			
	勘亭流	.200	-.388	勘亭流	.031	.779			
	ポップ	-.291	-.759	ポップ	.770	.103			
危険	丸ゴチ	-.242	.003	毛筆	.004	-.130			
	勘亭流	-.243	.126	勘亭流	.018	.000			
	ポップ	.874	.023	ポップ	-.711	.118			
自由	丸ゴチ	.429	-.149	毛筆	-.115	-.088			
	勘亭流	.042	.003	勘亭流	.019	.014			
	ポップ	-.911	.050	ポップ	.808	-.062			

table. 4 : 3つのフォントの因子分析 (p<.0001)

ゴシック体、勘亭流、ポップ体の3つのフォントの因子分析では、第1因子のレベルでは、

ポップ体は熱くない、危険ではないというイメージに関与している。また第2因子レベルでは、ゴシック体が熱さに関与しており、勘亭流は逆に熱くないイメージに関与している。この分析からは、次のような関係が想定されよう。

熱くなくて安全 熱くて危険
ポップ体 < 勘亭流 < ゴシック体

この結果は、単純集計の結果にもやや対応するように思われる。ただ、これは先ほどの2つのフォント間の因子分析にあるねじれを解決するわけではない。

3つのフォント間の因子分析の結果からは、熱い/熱くない、危険/危険ではない、というイメージにそれぞれのフォントが独立して関与することを示すようなデータは、実は全体としては現れていない。ポップ体を例にとると、丸ゴシック体、ゴシック体との対比と、丸ゴシック体、勘亭流との対比では、ポップ体は熱さと危険さのイメージに関与しているが、逆にゴシック体、勘亭流との対比と、毛筆体、勘亭流との対比では、ポップ体は熱くない、危険ではないというイメージに関与していることが分かる。そこで、table. 4の各因子分析から、それぞれ関与があると認められたイメージを一覧表にすると、fig. 5のようになる。

	熱い	熱くない	危険	自由		
ゴシック体	△				ゴチ/丸ゴチ/ポップ間	□
丸ゴシック体	▲	△▽	▲▲		ゴチ/毛筆/ポップ間	■
毛筆体		■	■		ゴチ/勘亭流/ポップ間	△
勘亭流		△▼▼			丸ゴチ/毛筆/ポップ間	▲
ポップ体	□■▽	△▲▼▼	□□▽▽	△▲▼▼	丸ゴチ/勘亭流/ポップ間	▽
					毛筆/勘亭流/ポップ間	▼

fig. 5 : 各フォントとイメージの関与

この一覧から考えることは、各フォントがどのイメージに関与しているか、ということよりも、特にポップ体が熱さや危険さというイメージと、ポジティブにもネガティブにも関わっているということだろう。しかも、常にそれが起きているわけではなく、あくまでもポップ体があるフォントとの対比の中で、熱さや危険さのイメージに関与していると考えられる。

結論として、フォントはそもそもそれ自体である特定のイメージを含み持っている、と考えるよりは、あるフォントはほかのフォントとの比較があって初めて、ある特定のイメージを伝達する効果を現すと考えるのが妥当である。フォントのイメージを決定するのは、そのフォントにある視覚情報が与えるイメージそのものよりも、そのフォントが置かれた環境に左右されると推測され、したがってフォントのイメージは、相対的なものと考えられるのである。

そこで、先に示した書字の情報処理モデル (fig. 4) を、次のように精密にしておく必要がある。

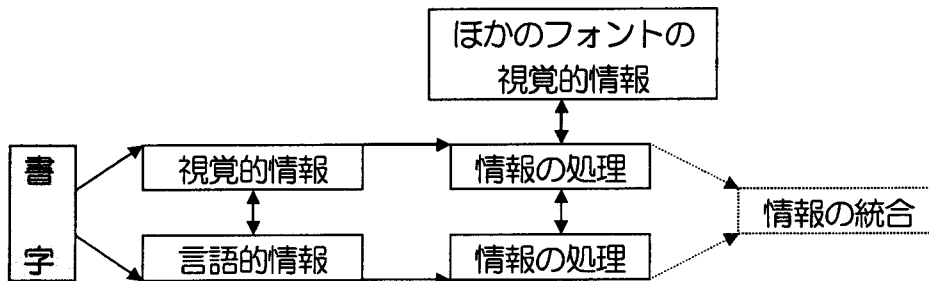


fig. 6: 書字の情報処理モデル - 2

6. 結論

ここでは、今までの考察結果をまとめるとともに、さらにもう少し広い視野からのモデル的な考察を試みておきたい。

われわれはまず、単純集計のレベルで、フォントはある種のイメージ伝達を行っていることは確認できた。また、このイメージは、言語情報との参照を行いつつも、かなり独立して生産されうることも推察された。

因子分析では、伝達されるイメージは、フォントに固有のものというよりも、ほかのフォントとの参照によって生み出される可能性が高いことが、部分的にはあれ、示唆された。いずれの場合でも、フォントは、相対的ではあれ、何らかのイメージを伝達していることは明らかになっただろう。

このふたつの考察をまとめてみると、フォントそのものになんらかのイメージが内在すると考えるのは、やはり妥当ではないと思われる。少なくとも「熱湯」に関する因子分析では、ひとつのフォントが自立したイメージの伝達機能を持っていることを裏付けるデータは析出されなかった。むしろ、あるフォントは、ほかのフォントとの対照によって、伝達されるイメージが相対的に現れることが予測された。

しかし、単純な集計結果もまた示唆的だろう。因子分析では有意なデータが現れなかった例を再考してみよう。先に「涼風」において毛筆体が高得点だったのは、毛筆体が、たとえばお茶のボトルのロゴマークでよく見受けられる、といった経験から、毛筆体→お茶のペットボトル→清涼感、というパスを通じてイメージが生産されており、それが清涼感を伴う「涼風」ということばと結びついたせいではないか、と述べたが、これは、フォント自体の固有イメージという仮説を支持できないとすれば、フォントが使用される場面を経験することによる、学習の強化という仮説にたどり着きそうである。

同様のことは、やはり因子分析では有意なデータが現れなかった「びっくり」に関しても

言えよう。得点の1位であるポップ体は現在、やはり気安さ、楽しさなどを伝達したい場面で多用されることは間違いない。それがびっくりという言葉と結びついたことは、やはりなんらかの意味がある。同じように勘亭流が2位になっていることもまた、勘亭流が相撲を連想させ、相撲がある集団ではかなりこっけいなスポーツと思われたり、あるいは勘亭流がまるでそれと縁のない「びっくり」と結びついて、その違和感がこっけいさにつながったり、といったパスを通ったことを示すものかもしれない。フォントによるイメージ伝達は、かなり社会的な影響の下にあると考えてよいだろう。先に示した書字の情報処理モデル-2 (fig. 6) には、フォントが特定のイメージを伝達するもうひとつの要因として、この社会的な学習による情報との参照を加えておく必要がある。(fig. 7)

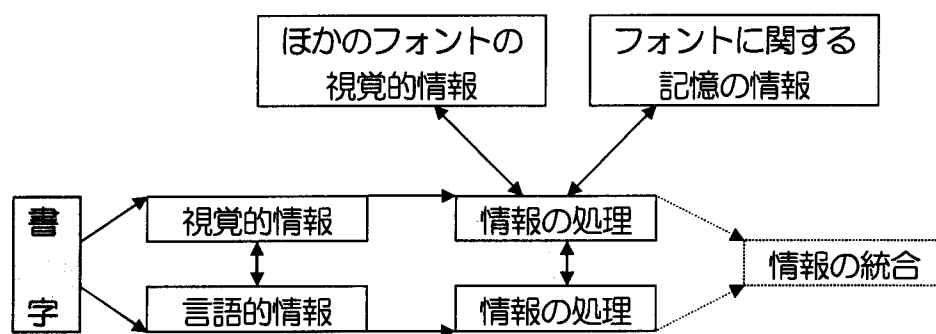


fig. 7: 書字の情報処理モデル - 3

7. 既存の研究分野との関連と展望

われわれのフォント研究には、語用論研究との興味深い接点がある。それは、ポライトネス理論である。ポライトネスという概念の捉え方についてはいろいろな説があるが、この研究に応用可能と思われるのが、中でも最も包括的な理論とされる Brown/Levinson(1987)の理論である。本来、ポライトネス (politeness) という語は、辞書的には「丁寧さ」や「礼儀正しさ」といったものを意味するが、Brown/Levinson の枠組みでは、ポライトネスとは「円滑な人間関係をつくるための言語行動」全般として捉えられるものである。つまり、平たく言うと、何が受け手にとって「感じの良い」、あるいは「感じの悪くない」ものであるか、ということに考慮した言語行動が「ポライト」なのである。(なお、Brown/Levinson のポライトネス理論の中心概念である「フェイス」については紙面の都合上割愛する。その定義および詳細については Brown/Levinson, pp.61-68 を参照されたい。)

Brown/Levinson は、ポライトネスを実現する手段、すなわち「ポライトネス・ストラテジー」を多数挙げているが、その中でもフォントによる伝達効果と関連づけることができそうなのが「ヘッジ (hedges)」である (Brown/Levinson, pp.145-172.)。というのは、ヘッジ表現は、対象を曖昧化することで発話内効力を弱めるのがその中心的役割であるが、不変化詞のよう

な語や句、副詞節などといった言語的手段によってだけでなく、身振りや表情、あるいは声のトーンといった非言語的手段によっても実現できるからである(Brown/Levinson, 172)。このことは、コミュニケーションにおける非言語的情報の重要性を示していると考えることができる。これは、パソコン通信や電子メールでのコミュニケーションで用いられる、いわゆる「フェイスマーク」の重要性と共通していると思われる (Brown/Levinson のポライトネス理論とフェイスマークとの関連については高本(1993)を参照されたい)。すなわち、活字によって言語的な情報を伝えるだけでなく、ある種のフェイスマークを用いることによって、ある種のイメージを付加することができるというわけである。フェイスマークとはやや異なるが、メールやインターネットの掲示板で、「お前、バカだろ」と書かれている場合と「お前、バカだろ (笑)」と書かれている場合の違いからも、同様の効果が窺われる。

つまり、語用論的立場からは、書字における、その基本的な言語的情報量とは捉えられないパラ言語的な現象と、対人関係の調整との関連に関心が払われているわけである。われわれの研究との関連でいえば、ある状況において、ある言語表現が、対人関係を考慮してどのようなフォントでモディファイされるのか、あるいはされないのか、という観点に適用できるだろう。たとえば、ある人が「さわるな」と書いた張り紙をするときに、もしその人の中で「ゴシック体で<さわるな>って書くよりは、丸ゴシックで<さわるな>って書いたほうが感じが悪くなるかなあ」という配慮が働いているとすれば、フォントが重要な非言語的要素のひとつになることは間違いない。

再びポライトネスという観点に立ち戻ろう。ポライトネスとは「円滑な人間関係をつくるための言語行動」であるが、これには2種類ある。ひとつは、上の Brown/Levinson のような、戦略的にある人間関係および状況を作り出すための意識的なポライトネス。もうひとつは、遵守されていてしかるべきだが、意識的に遵守しているわけではないポライトネスである。後者のポライトネスは、遵守されていてしかるべきで、意識的に遵守しているわけではない、という「無標状態」すなわち「ディスコース・ポライトネス」(宇佐美 2001, p.11) である。「無標状態」からの逸脱行為は、何らかの効果を生み出す「有標行動」となる。そしてこの有標行動は、「感じのよさ」というプラス効果、「感じの悪さ」というマイナス効果、あるいはその他の効果 (あるいは効果なし) のうちいずれかの効果を生み出す可能性を有している。フォントの使用にある種の社会的な規範が存在する (教科書体、官公庁の印刷物に頻出する明朝体、銀行のロゴマークに多用されるゴシック体、ほぼゴシック体である鉄道の駅名表示など) ことから、このようなポライトネスの捉え方をフォントの研究に応用できよう。このような規範的なフォントの使用が「無標状態」であり、そこからの逸脱が何らかの効果を生み出し得るとみてよいだろう。(たとえば、もし警察庁の看板が「**警察庁**」であったら、どのような (個人的および社会的) リアクションがあるだろうか?あるいは実際の例として、2002 年の北海道大学オープンユニバーシティのパンフレットは、ほぼ意図的に変形ポップ体が使用されている) このように、フォント使用には意識的な側面に加え、無意識的な側面もまた存在すると考えると、フォントの重要性が見えてくるであろう。

このように語用論の立場からは、パラ言語的な現象に着目して、対人関係の調節、ひいては自己の印象管理という現象に関心が向けられているわけで、この視点は、ある領域ではそのままわれわれのフォント研究に適用が可能と思われる。

ただ、われわれの研究は、フォントの視覚的情報というパラ言語的な要因が、*politeness*に限定されない、広範なイメージ伝達に関与しているという、ここで触れたような語用論よりも広い関心に導かれている。これはあるいは、語用論研究の領域を広げるか、あるいは語用論を内包したより大きなパラ言語学的な研究への道をひらく可能性があるだろう。

われわれの調査は方法的にもまだまだ未熟であるが、今後、語用論、認知心理学などの諸成果を踏まえながら、フォントのより精密な因子分析を可能にするための調査票の作成、因子分析から得られた仮説的な説明モデルの実験による裏づけ、さらにはフォントの社会的なイメージに関するフィールドワークを行うことで、フォントが言語にとって極めて本質的な一面であることを示したく思う。

参考文献

- Brown, P./Levinson, S.C. 1987 *Politeness. Some Universals in Language Usage. Cambridge University Press, Cambridge.*
- Massironi, M. 2002 *The Psychology of Graphic Images. Laurence Erlbaum Associates, London.* pp.41-43.
- 高本條治 1993 パソコン通信におけるフェイスマークの機能. *日本語学12-13 (12月号)*, 明治書院 pp.63-74.
- 宇佐美まゆみ 2001 談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想. 第七回国語研究所国際シンポジウム報告書—談話のポライトネス, 国立国語研究所編 pp.9-58.

(石原次郎：北海道大学大学院文学研究科 助教授)

(熊坂亮：北海道大学大学院文学研究科 博士前期課程)

付記：論文の作成にあたっては、石原/熊坂両名が、調査と分析を行い、テキストの作成は熊坂との討論をしながら1. -6. を石原が、7. を熊坂が担当した。

また、今回の研究が、北海道大学文学研究科教授菱谷晋介氏、同博士後期課程宮崎拓弥氏の、大変心のかもったご協力、ご助言なしでは到底なしえなかったことをここに記して、謝意を表したい。方法的な欠陥の責任は、あくまでも石原/熊坂にある。